

ート調査、農民との対話、農村青年との討論会などを行ない、積極的にこれを取り入れた。

本論文で明らかにした点は以下のとおりである。①広範な洪積台地、多発する早害、台風の打撃などの地域的特性により、赤羽根ではより商業・流通資本がとらえやすい商業的農業畑作部門においてのみ、農業の発展が可能であった。②したがって赤羽根農業の発展は、商業的農業のより高度な展開によるものであり、その最も高度な発展段階が現在施設園芸を主体とするきわめて集約的な農業としてあらわれている。③農業における商業化の進行は、農業がより広範に、深く資本主義経済の中へ、すなわちその再生産構造の中へ取り込まれていく過程にほかならない。そこでは農業の地位は常に従属的・受身的である。このことが赤羽根の農民層分解を促進し、地域の発展を方向づけてきた。④日本資本主義の地域への諸要請と地域自らの要求が対立するなかで農民層分解として現象しないうちでも、地域（赤羽根）には多くの農業・農民問題が内包されてきた。今日、表面的には「豊かな農村」と言われていようとも、その背後には、たとえば過重労働（特に婦人の）や資金難をはじめとして多くの深刻な農業・農民問題が存在する。⑤現代の日本資本主義は、地域に対して集約的で大規模な専門的経営を要求する一方、「東三河臨海工業地域」建設による急速な「都市化」工業化への傾斜という矛盾を押しつけた。そのなかで今後の地域の発展は、大規模な農民層分解という方向で行なわれざるを得ない様相を強めている。

大宮台地東南部の農業地理的考察

— 植木栽培を中心として —

齊 上 和 佳 子

| | | |
|--------|-----|-------|
| 〔論文構成〕 | 第1章 | 地理的位置 |
| | 第2章 | 自然環境 |
| | 第3章 | 人文環境 |
| | 第4章 | 農 業 |
| | 第5章 | 植木栽培 |
| | 第6章 | まとめ |

調査地域は、大宮台地の東南部で、行政的には、浦和市と川口市の東部地域にあたる。この地域は、都心から半径15km～25kmの地帯にはいり、工業都市である川口市や住宅都市である浦和市にあるわけであるが、この地域の産業は農業が中心であるという特色をもつ。

大宮台地はこの地域では2つに分かれていて、その間に見沼低地があり、東側には中川低地がある。台地は開析が進んで、谷底など比較的变化に富んだ地形を表わしている。

この地域の農業においては、作物として植木の栽培に特色があり、専業農家率は40%内外と高い割合を示す(埼玉県平均14.8%)。植木の栽培は古い歴史をもち、江戸時代の明暦の大火をきっかけに始まったといわれるが、江戸の発展、その後の東京の発展とともに、この大都市への植木の供給地として最も大きな位置を占めてきた。その古くからの歴史が流通面や技術面において、優位な条件をつくり、また、植木という作物が、地価の値上がりや労働不足に悩まされている都市近郊において経済的に有利な作物であることも重なり、この地域では、農業を意欲的に存続させていく意志をもつ経営者が多い。しかし、その場合規模を広げるだけの余地は、この地域内で得られないため、今後、地域外への分圃や委託栽培などの増加の方向あるいは造園業といった集約化の方向に進んでいくと思われる。川口市もこの地域を生産緑地として残したいという意向をみせているがこの地域のかなりが市街化区域に指定されていることもあってむずかしい面がある。

小糸川流域の地理学的考察

柴田裕美

小糸川は房総半島を北流し東京湾に注ぐ2級河川で、流域は君津市と富津市内にある。考察の目的は1河川全体を把握することによって、河川が流域に与えた諸影響を知ること。及び本地域に東京を中心とする圏構造が存在するかどうかである。

自然環境 地質は第三紀層の砂岩、泥岩の互層から成り、北西に緩傾斜した単斜構造を成している。地盤が下刻しやすかったため、小糸川は3段の段丘を作って穿入蛇行している。段丘のうち上位にはローム層をのせているが、下の2段は沖積段丘である。段丘面と河床面との比高は10～数10mもあるため、上中流部では引水が不可能である。一方、湧水性の高い地層の多い単斜構造のため、被圧地下水は自噴する。土壌は一般に中細粒質で、谷底平野や下流部にグライ土がみられる。